

第2回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

日 時 平成31年3月28日(木) 18:00~20:10
会 場 市役所本庁舎2階 第四委員会室
出席者 石垣のりこ委員、植田今日子委員、遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔
輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、野家啓一委員、マリ・エリザベス
委員、本江正茂委員

- 議 事
- 1 開会
 - 2 議 事
 - (1) 第1回検討委員会における議論の振り返り
 - (2) 今後のスケジュールについて
 - (3) 中心部震災メモリアル拠点のあり方について
 - (4) その他
 - 3 閉 会

配布資料

- 資料1 第1回検討委員会の意見整理
- 資料2 第1回検討委員会の意見一覧
- 資料3 今後のスケジュールについて

○事務局(高橋室長)

ただ今から「第2回中心部震災メモリアル拠点検討委員会」を始めさせていただきます。本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。本日は、机と椅子が特殊な作りになっているものですから、大変恐縮ですが、座ったままで話をさせていただきます。

本日の議事進行につきましては、委員長にお願いしたいと思います。それでは、野家委員長、よろしく願いいたします。

○野家委員長

それでは皆さま、2回目になりますが、よろしく願いいたします。

今日は少しリラックスして議論していただくということで、通常の役所の会議とは、相当違ったアレンジメントに事務局に考えていただきました。本日は中心部震災メモリアル拠点のあり方を検討することとしていますが、前回、本江副委員長から「アイデアを実質的に出せるような会にしていただければ」というご発言がありましたので、今回は事務局に工夫していただきまして、このようにホワイトボードを並べて、発言を逐一書き込んで行ってもらおうという事にいたしましたし、この丸い椅子の形、本当は床に座って車座で議論するのが一番いいのかも知れませんが、それだとちょっとテレビ映りが悪いかも知れませんが、こういう形にさせていただきました。よろしくご協力いただければと思います。

それから、少し遅れて来られる方がいらっしゃいますが、時間もありますので、先へ進めていただきます。あらかじめご了承ください。

それでは、会議の議事次第に従って進めてまいります。まず、会議に関わる留

意点につきまして、事務局から説明をお願いします。

○事務局（高橋室長）

はい。それでは、はじめに傍聴の方へのお願いでございます。本日、お配りしていただきます「会議の傍聴に際して守っていただきたい事項」をお守りの上、傍聴席以外に立ち入らないようにお願いします。

次に配布資料を確認させていただきます。本日は委員の皆さまのお座席に、次第と委員名簿、座席表、資料一覧、資料 1 から 3 を置かせていただいております。資料の不足がございましたら、事務局までお知らせいただければと思います。

続きまして、本日の出席状況についてご報告いたします。本日は植田委員より遅れて出席する旨の連絡を受けております。植田委員を入れまして全ての委員に、仮に植田委員が急遽欠席された場合でも全 10 名中 9 名の委員の皆さまにご出席いただきますことから、要綱第 5 条第 2 項による定足数を満たしている事をご報告申し上げます。

それから本日も議事録を作成いたしますので、ご発言の際にはお手元のマイクをお使いになってお話をしていただけたらと思います。このマイクですが、指向性がかなり強い物ですので、今、私がしゃべっていますように、口に真っ直ぐに向けてご発言いただければと思います。

事務局からの留意点は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。それでは、議事に入る前に本日の議事録署名委員を指名させていただきます。前は石垣委員にお願いしたところですが、本日は、植田委員が遅れておりますので、遠藤委員にお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

○遠藤委員

はい。

○野家委員長

ありがとうございます。それでは、そのようにさせていただきます。

それでは、議事の 1 番目ですが、第 1 回検討委員会における議論の振り返りです。既に事務局から前回の議論の要点をまとめた文書をメールで皆さまのお手元に届けているかと思いますが、今回、2 回目の議論を始めるにあたりまして、前回の会議で皆さんにご発言いただいた幅広い意見を踏まえながら、議論を進めていきたいと思っています。

では、第 1 回検討委員会における議論の振り返りについて、事務局から資料の説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

はい。それでは恐れ入りますが、着席のまま説明させていただきます。

では、第 1 回検討委員会における議論の振り返りについて説明いたします。資料の 1、

2をお手元にご用意ください。

この資料1は、前回の第1回検討委員会の意見を整理したものでございます。ちなみに意見につきましては、資料2の方に発言順で一覧にまとめさせていただいています。その発言ごとに要約したものを資料2の方に太字で入れておりまして、その太字で入れた要約をまとめたものが資料1になります。

資料1の項目をご覧ください。項目は全体に関わる事項と、「何のために」・目的に関する事、「何をどのように」・目的を達成するための要素、そして、仙台の特質、これらの項目毎に意見をまとめさせていただきました。全ての読み上げはいたしません。が、その項目ごとに見出しだけ紹介させていただきます。

まず、全体に関わる事項、「(1) まず先に何をやる場なのかを考える」。この下に例えば22佐藤(泰)というように発言を記載しておりますが、これが資料2と対照しております。そして「(2) 過去の事例に学ぶ」、「(3) 他の被災地に聞く」、「(4) 他施設との関係性や活用を考える」、「(5) 震災当時の被災状況を感じられる現場では無いことを念頭において考える」、「(6) 地元住民にとって客体化する危険性があることに注意が必要」、「(7) 悲惨な体験を乗り越えるためには忘却も必要であること」、全体に関わる事項としては、こういった意見をいただきました。

では、「何のために」・目的の部分です。こちらは「(1) 世代を超えて経験をつなぐため」、「(2) あらゆる危機を乗り越えるため」、「(3) 都市の未来のため」、これにまとめられるような意見をいただきました。

そして、「何をどのように」・目的を達成するための要素です。こちらは「(1) 伝承に求められる基本的な要素」として、1番「現場・人・物のセットが必要」、2番「アーカイブが必要」、こういった意見をいただきました。そして「(2) 世代を超えて経験をつなぐための要素」として、1番「持続的な動き」、2番「震災にとどまらない広がり」、3番「多様な経験」、4番「あらゆる人に受け入れられる物語」、こういった項目について、ご意見をいただきました。「(3) あらゆる危機を乗り越えるために必要な要素」として、1番「防災について学ぶ仕組み」、2番「市民のアクションにつなげる仕組み」、3番「これから起こり得る災害や想定外がある事を考える仕組み」、こういった項目について、ご意見をいただきました。「(4) 都市の未来のために必要な要素」として、「災害文化やアイデンティティを創造する仕組み」について、ご意見をいただきました。

そして、仙台ならではの機能を追求すべきという意見もいただき、仙台の特質として「(1) 東北のゲートウェイであること」、「(2) 東北唯一の政令指定都市であること」、「(3) 市民力のまちであること」、こういった事について、ご意見をいただきました。

なお、こちらは、あくまでも第1回検討委員会で出た意見を整理したものでございます。これからまとめるコンセプトが決してこれに基づいてという事ではなく、ここに上がっていないことを発言できないという事でもございません。あくまでも、前回の意見を整理したものですので、後ほど、あり方を議論していただく中で、参考にさせていただく資料になります。議論の振り返りの説明は以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。ただ今、資料1と2に基づいて、前回の議論を要約していただきましたが、この点につきまして皆さまからご意見あるいはご質問等ご

ございましたらお願いします。

よろしいでしょうか、それでは、出来るだけ後の方の議論の時間を長く取りたいので、先に進めさせていただきます。

では次の議事ですが、今後のスケジュールについてです。それでは、事務局からご説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、資料3、今後のスケジュールについて説明させていただきます。

こちらは委員の皆さまと、今後どのような形で議論を進めていくか、全体のスケジュール感を共有するためにお示しいたします。なお、これに縛られるものではないです。

まず、本日3月28日に第2回検討委員会、5月16日に第3回検討委員会を予定しております。この2回で、拠点のあり方やコンセプトを検討していきたいと考えております。

それを踏まえまして、8月上旬に市民の方にご参加いただくイベントを考えております。こちらでもできるだけ委員の皆さまにもご参加いただきたいと考えております。

そして、8月下旬から9月上旬に第4回の検討委員会を開催いたしますが、こちらはこういった会場ではなく、もう少しオープンなスペースで、今は傍聴席の方に発言しないでくださいということが書いてあるのですが、傍聴席の方も発言できるような市民参加型の検討委員会を検討しております。

そして、10月に第5回検討委員会、この第4回の検討委員会と第5回の検討委員会で市民参加のイベントの結果なども踏まえながら、この拠点の役割や機能の検討をさせていただきますと思います。

そして、11月に世界防災フォーラムと仙台防災未来フォーラムが予定されておりますので、こちらの機会でシンポジウムをさせていただきますと考えております。

そして、ここには第6回、第7回と2回分で書いてございますが、来年1月ぐらいから、その機能の具体像を検討させていただき、目標としては夏ぐらいまでに報告書を取りまとめただけであればと書いておりますが、議論、検討の進行状況によって全体のスケジュールは柔軟に対応いたします。

そして、平成33年3月末までにパブリックコメントを経て、基本構想を策定したいと考えております。以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。ただ今、資料3に基づいて、今後のスケジュールについてご説明いただきました。何かこのスケジュールの進み具合について、ご意見あるいはご質問ありましたら、何でも結構ですのでお願いします。

○本江副委員長

11月の世界防災フォーラムのシンポジウムは、この委員会あるいは仙台市として何らかのプレゼンテーションをするという意味なのか、そこでディスカッションの機会を持つのか、具体的にはどういう感じのものですか。

○事務局（庄子課長）

10月までの進み具合によって少し形が変わるのではないかなと思っておりますが、「単に表明する機会」という形にはならないのではないかとと思います。

○本江副委員長

せっかく関心のある方が来られるから、議論する機会に使えるといいなと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。ほかに何か、スケジュールあるいは進行の方向性について質問等がございましたらお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、次が今日一番のメインイベントということになりますが、議事の3番目、中心部震災メモリアル拠点のあり方についてに入らせていただきます。

中心部震災メモリアル拠点のあり方については、今回資料は用意してございません。先ほどの第1回の委員会の振り返りのおり、前回は皆さまから大変貴重で多様な意見をいただきました。今回はこの拠点のあり方ということで、全体的な視点から皆さまが相互に意見を交わして議論を深める場にしたいというふうに考えております。

そのために、このようなしつらえにわざわざしていただいたのですが、この部分の司会進行は、副委員長の本江さんをお願いしたいと思います。本江さんはこういう場に慣れていらっしゃるのと、ファシリテーターとして極めて優れた能力をお持ちですので、委員長としては全面的に本江先生にこの仕切りをお願いしたいと思います。副委員長の本江さん、よろしいでしょうか。

○本江副委員長

分かりました。僭越ですけれども、立ちますね。今日はブレインストーミングです。委員長からご指名でございますので、こういう特殊なセットアップをしてもらって自由に意見が言えるようにしたいということで、前に出てきてもいいので話をしたいと思っております。

前回の振り返りを改めて聞くと、本当に何も決まっていない。本当に何をしたいのか分からないでいると。何をつくったらいいのか、これからみんなで考えて決めようと、つくっていきこうというところがある、そういう正直な会です。どこか他のところにあるようなものをここにもう1個つくって、何か前例踏襲してやることではないという、ある種の気迫というか、新しいことをやらねばならないということがあらわれて、我々は責任が重いですが、ブレインストーミングなので、いろいろなアイデアを出す。

ブレインストーミングの基本的な約束は、つまらないことを言ってもいい。なるべくたくさん言う。それから、ここで誰かが言った瞬間に、それは誰か特定の人のアイデアで、あれは志賀さんが言っていたとか、石垣さんが言っていたということは無しで、我々みんなのこの場で出た意見だということにするということです。このメンバーであれば大丈夫だと思いますが、あいつあんなことを言っているみたいなことは無しです。出たら、みんなの意見で、それは結果的に淘汰されるようなことはあるかもしれないけれども、それは言ってもいいという約束です。

それから、ネガティブなことを言い出すと、それは無理じゃないのみたいなことを

言うと、空気がしぼんでしまうので、そういうことは言わないという約束で進めたいと思います。

テーマは、中心部の震災メモリアル拠点です。拠点という言い方が曖昧なもの、これはまだ決まっていないということですし、施設をつくりますということでは決まっているわけではなくて、何らかの求心力を持った拠点であるのではないかと考えているだけなので、それが何のことかもよく分からない。でも、これ「郡盲象を撫でる」みたいになってしまっていて、少なくとも被災を経験したり、それについて考えてきた我々は、その地域の市民としてこういうことをやるべきではないか。あるいはセンターである仙台市として何かやる、メモリアル拠点を持つ。そのメモリアル事業の一部として、荒浜小学校があったり、交流館をつくったり、さまざまな具体的なイベントをやったりしてきています。そのうえで、そのある一つのメモリアル拠点を中心部、みんなの便利のいいところに何か持つ。ということをしたときに、どんなものであるのかということを考える。

別に今日結論を出したいということではなくて、いろいろ言う。先ほどスケジュールもありましたけれども、少なくとももう一回しぐらいは議論できますし、また我々だけでは足りない部分は市民の皆さんと一緒に話す機会もあるということですので、今日の議論は、そのよく分からないメモリアル拠点の姿をいろいろな角度から言い合っていて、ここら辺にモヤっとした象が出てきて、ある人は尻尾のことばかり言うとか、牙が気になる人もいるとか、全体のシルエットが気になる人もいるとか、いろいろな話があるのは当然のことなので、そうしながら何かメモリアル施設のあり方を掘っていきたいということでもあります。

こういうのをやるときに、全くフリーハンドでやってもいいんだけど、余りフラットだとやりづらいので、時々使うやり方を一つ紹介したいと思うんですが、ホワイトボードを用意いただきましたので、基本的にはこっち（ホワイトボードに向かって左側）が抽象度が高い話、こっち（右側）により具体的なシーンにかかわる話みたいにしていきたくて。物を考えるときに、すごい具体的なシーンばかり思いつく人もいますし、何か観念的なことから入りたい人もいますので、それはいろいろなタイプの人がいるということがオーケーということですので、そういう感じでいきたくて思っています。

それで、こういう、そもそも何をやったらいいのかわからないというときに、時々使う補助線があるので、今日はそれを使いたいと思います。これは奥出直人さんという人のデザイン思考のやり方にあるんですけども、哲学とビジョンと、これはよく使われる言葉だけでも少し整理をして、コンセプトと具体的なシーン、抽象度のレベルでこういうふうに分けようとしています。

哲学というのは、これは野家先生の前で話すのは恥ずかしいんですけども、フィロソフィーです。これは「かくありたい」という、非常に肯定的な文章で格調高く言われる。だから、これは、「我々は」とか「人は」とか「市民は」とか、何かそういう言葉で始められます。

それからビジョンというのは、その哲学を受けて何とかしたいという、欲望のステートメントとして書かれていて、コンセプトは、これらを実現するための具体的な技術やアイデアが組み合わされたものです。シーンは、そうやってできた何物かを使って、こんなことが行われるという具体的なイメージ、まさにシーンのことです。

例えば、これはよく使う比喻なんですけれども、ちょっと古いですがウォークマン、若い人にはウォークマンが登場したときのインパクトが分からないのでこの比喻が通じないんですけれども、ウォークマンが出てきたとき、1979年です。おおっと思った皆さんいらっしゃると思うんですが、ソニーがウォークマンをつくりました。ウォークマンを作ったときの哲学は、これはかくありたいですから、すごく高邁で「人は自由に音楽を楽しむことができる」みたいな感じです。当時はレコードの時代です。これをリビングルームにハイファイセットがあって、じっと聴くみたいなものが音楽を聴くという行為だったんですけども、我々はもっと自由に音楽を聴くことができるはずだというのが哲学です。

その次のビジョンは、何々したいです。これは欲望として書かれるので、今リビングでしか聴くことができない音楽、例えばカラヤンの第九、これをもっといろいろなところで聴きたい。そうすると、あのでっかいステレオを持って歩けないのという話になります。でも、我々はもっと自由に音楽を楽しむことができるはずだ。ステレオを持って出かけた。いろいろな場所でこの音楽を楽しんでみたいというのが欲望です。

それについてコンセプトというのは、具体的な技術とかの組み合わせによって、このビジョン、欲望を実現するためのアイデアのセットです。だから、ウォークマンで言えば、なるべく軽く小さくしないといけないから、電池で駆動するテープレコーダーを使う。その技術自体はもうあったんですけども、会議の録音みたいなことにしか使われてなかったものを、録音は要らないと言って、録音する機能がある分値段が高くなっちゃうし、重くなっちゃうからそれは要らない。再生専用でよろしい。そのかわり、なるべく長く電池がもつ。そして、すごく小さくて軽い。重いと持ち歩きしにくいから、この欲望に対して阻害してしまうから。

音楽を楽しむのは、1人で聴くんじゃないから、最初のウォークマンってイヤホンジャックが2つあったんですよ。一緒に外で聴けるようになって、あるときそのコンセプトは失われるんですけれども、でも音楽をみんなで聴きたいと。だから、イヤホンのジャックは2か所あります。みんなそんなにヘッドホンなんて持ってないから、標準の付属品として付ける。それは軽くてカッコいいみたいな。

そして、その当時ソニーが持っていたいろいろな技術を組み合わせて、あの僕らが知っているウォークマンがつくられます。音楽を自由に楽しむことができる。ステレオを持って外に出かけた。だから、ああいう装置をつくる。2人で音楽を聴きながら散歩するとか、枯れ葉の落ちる公園を1人で泣きながら音楽を聴くとか、ゲレンデでスキーをしながら音楽を聴くとか、そういういろいろな具体的なシーンがありますよということです。

今、この分け方の説明だけしましたが、仙台市のメモリアル施設に戻りますが、これは技術とアイデアが組み合わされています。なので、そんなふうに考えたらいいかなという一つのアイデアです。中心部に何かを置く。コンセプトとしては、震災の経験を経た我々がそれを何らかの形で覚えておく。覚えておいてどうするのかとか、その施設はどういう哲学に基づくものなのか。我々はそれを通じて何をしたいと思っているのか。それを実現するために、こういう要素で組み合わされているのではないだろうか。そこでは、こういうことが行われるのではないだろうか。というようなことを話せるといいかなと思っています。

それで、別に上から順にいきますみたいなことではないので、これから 8 時までなので 1 時間半だから、皆さんがてんで好きなようにしゃべるとあっという間だと思いますので、余り構成は心配していませんが、1 時間半ぐらいで話を順にしていきたいと思っています。順にというのは、ばらばらでいいですよ。今出ていたのはコンセプトっぽい話だよとか、これが具体的に出てきたら、それはこういうことを望んでいるということになるねとか、それを一言ステートメントとして言うのはこういうことですねというような形で、行ったり来たりしながら話ができればいいかなと思っています。

これはいつもやるんですけれども、急に言えといってもなかなかできないので、2 分ぐらい考えてください。2 分は長いです。2 分ぐらい時間を取りますので、メモリアル施設です。皆さん何となくイメージがあると思います。それはこういうものだといいことを何かお話していただきたいんですが、それはこういうことをやるための場所だよ、前回の議論の中にももう既にたくさん出ているわけです。だから、これの繰り返しでももちろん構いませんし、これを踏まえて新しいことを言ってもいいし、前回と違うことを言ってもいいです。ブレストですから、矛盾することが出てくるのも全く構わないので、こんなことじゃないかなというのを教えていただければと思います。2 分ぐらい考えたいと思いますので、その後、銘々に話をしていただきたいと思います。いいですか、質問ありますか。では、2 分。

○遠藤委員

先生、これは書かなくていいですか。

○本江副委員長

紙と付箋を用意してもらっているので、何か書いていただけるといいけど、キーワードだけ書いてください。そうでなくて口頭で言ってもいいです。立ち上がってここに来ていただいてもいいし、ここで何か書きながら来ていただいてもいいので、何か考えてください。こんなことじゃないかなというようなことを話していただけるといいと思います。

例を挙げていただいてもいいです。あそこのあんな感じのやつは、我々の参考になるんじゃないかなということを教えていただくのもいいし、こういうものであるべきだという話をしていただくのもいいです。

(2 分間をおいてアラームが鳴る)

○本江副委員長

はい、2 分です。俺が司会をやっていると俺が言えないという弱点があるので、例えばですけども、僕が話したことで言うと、シーンでこの間、子育て支援施設の話ちょっとしたと思いますが、被災したお母さんたちが、震災のことを直接は経験していない新しく越してきた人たちに、「私のときはこんなことがあったよ」と。「おむつとかちゃんと買っておかないと、あれはなかなか手に入らないわよ」とか、「避難所にはないわよ」みたいな話をするような、何か直接お話ができるようなことがその場所では行われるのではないだろうかという、何か被災経験者がしみじみ、変な言い方か

もしれないけど、経験を話す。

これは特別な係の人がショーとして話すということではなくて、居合わせている人たち同士で、「こうだったのよ」みたいなことが話せるような、そういうシーンがあるんじゃないだろうかみたいな話をこの間しました。というふうなことを言ってもいいし、例えば 1,000 人規模の集会在可能な広場を持つみたいなことがコンセプトで、写真を撮っているいろいろな人が見て、「あ、これは仙台だな」と思うような何か強烈な造形のモニュメントがあって、それがシンボルとして働くみたいなことは、この話でいえばコンセプトです。

いろいろな記念の日に、みんなで集まりたい。そこで思いを一つにするような場を持ちたいみたいなことはビジョンとして語られる、というような感じにしたいと思います。何となく幾つかできたでしょうか。

誰が口火を切るかというのは結構大事です。ぐちゃぐちゃの字で書きますけど、許してください。読めなくなったら、言っていただければと思います。漢字が書けないので片仮名で。何か教えてください。

(石垣委員の付箋を手に取り) 100 年間の予算化する、これは技術的なことですね。100 年分の予算を取るといふ、はなから政治的な。どういう思いで。

○石垣委員

ビジョンが幾ら立派でも、なかなかその志を支えるもの、先立つものはがないと続かないというのは、生活者として非常に感じるころがあるので、ここでやると決めたら 100 年ぐらい先を見通して、そのぐらいの覚悟でまずはやれる最低限の環境をつくっておくということが必要なのではないかとということで、多分皆さん余り触れないであろうと。

○本江副委員長

いきなり金目の話ですけれども、毎年単年度の一般会計予算でやっている、今年は縮むとか、いろいろな他のあおりを食っちゃうから、何か独立したそれこそファンド、基金化してそれをやるみたいなことで、安定してやれるというような仕組みが要るんだらうと。ありがとうございます。金目のことを何か書いた人がいれば、重ねて言っていただけるといいですが。誰からでもいいですが。

○植田委員

農山漁村でよくされている地元学という取り組みがあって、結城登美雄さんとか、吉本哲郎さんが提唱している、「ないものねだりじゃなくてあるもの探し」というふうなことがキャッチフレーズになっているんですけれども、仙台市にも既に災害文化というものがあると思うんですね。仙台では常識であること。仙台は 30 年に 1 回、と考えるのは今は危険だと言われているけれども、30 年に 1 回地震を繰り返してきたままという固有性があると思うんですね。その中で当たり前と仙台の人は思っているかもしれない災害文化というものがあると思うんですけれども、何かそういったものが見えるような形の、何か取り組みであり、展示なりアーカイブなりというふうな、これはコンセプトかもしれないんですけれども、何か一つ思い浮かんだことだったんですけれども。

○本江副委員長

なるほど。災害文化のあるもの探してみたいな。ここの線引きはそんなに厳密なものではないんだけど、あらかじめこうしたことをやっておいて、それを実相するミュージアムのようなものとしてつくるべきだということなのか、そうじゃなくてこのあるもの探しをし続けること自体が、この拠点の役割というか、活動なのだということであれば、あるもの探し続けて災害文化を繰り返し再定義するような活動をしたいというようなことがあれば、これはビジョンじゃないかなと思いますけれども。ありがとうございます。

何かそういうあるもの探しとか、災害文化というの、この間から出ているキーワードだと思いますが、何かこれに関わることがあれば。ブレインストーミングですから、本当は順番に当てるといのは避けたいわけですね。それでしたら、これ私も同じようなことを言っていますというのがあれば、割り込んでいただけるといいです。どうでしょうか。地元、あるもの探しということで。

○志賀委員

ちょっと長くなるかもしれないですけど、前回、私自身が忘却、忘れることを全身で行うことで、どうにか乗り越えてきたことをちょっと言ったと思うんですが、今一度振り返ったときに、自分自身がその体験をいろいろな形で語ることで整理がついて、忘却といっても完全に忘れるのではなくて、忘却のバランスが大切で、それがどうもうまくいかない場合、心を病んでいる方もいたと思うんです。

抽象度を上げることを前回言ったと思うんですけども、この8年間でなぜそれが必要だったかというのは、やはり死をずっと考えていたということがあって、2,533人がいまだに見つかっていないということがあって、私自身こういうことをこの場で言うのはすごく勇気の要ることなんです、その方についてどういう思いがあるかという、何というか、どこか自然界のどこかで多分白骨化しているだろうと。それはどこか流れ着いた先なのか、海の底なのか、川の底なのか、本当の食物連鎖でつながっているいろいろな動物や生物、微生物で解体されて、今もこの世で生きているんだというような、抽象度の高い、でも、きっと本当のことが私の中でずっと衝動として抑え切れない気持ちとしてあって、今日の人間社会では成し得ないというか、そういう次元の死というのが津波によって引き起こされたことへの、人間社会の意味というのを考えています。

避難所で「今日からここで生活します、ここが私たちの避難所になりました」となったときに、テレビが置かれてたくさん映像で被災の様子が流れていたんですよ。そのときに、はっと周りを見ると、誰もテレビを見ていなかったというのがショッキングで、じゃあどうしていたかという、皆さん、新聞に写された小さい写真を見ているんです。だから、流れ続ける映像を受け続けるということが多分ものすごくつらいんですね。被災の映像を見続けることが、ものすごく体に負担をかけていたと思います。

私自身、津波を目の前で見、水をかぶりながら逃げることが、皮肉にも今となっては本当に病まない、病気にならなかった、心身を病まないという理由になっちゃったような気がします。というのは、自分の肉体と共にあのとき見るということ

をしたからこそ、乗り越えられたということがあって、逆にあの状況を安全な場所でテレビでずっと見ていたということの体への負荷のかかり方を思うと、とても私は気が狂いそうになるくらい辛い。だから、まだ見ぬ現実のトラウマみたいなことにどう向き合うかということがあるなというふうに思っていて、そこから具体的にメモリアルということが拠点と言われて、すごく私なりに前回の後考えていました。

アメリカに住んでいる友人にこの被災のことを知らせるときに英語に訳された、もしくはいろいろな国の言葉で訳された被災地の人たちが納得するような形の本があると思ったら、なかなかなかったので世界中のどこの図書館に行っても、この被災というものが抽象度が高いことから具体的なことまでというのが、その言語で語られる本みたいなものがあるといいのかなというの少し思っていたんです。

先日メディアテークの図書館に行きまして、震災文庫のコーナーを見てきたんですけども、やはりものすごくたくさん本がもう出版されていて、それぞれの取り組みがあってというふうなことになるんですが、でもその本棚の前に立つと何か迷子になっちゃうんです。圧倒的な本の数で、ふわっと迷子になるような圧があって、まずどの1冊を取ればいいのか分からないという。なので、やはりそこにはキュレーション的なこと、セレクト、そして案内人のような、どの本はこうですというような案内人のような人が必要なんだろうなということを思い始めたときに、拠点と言っていいのか分からないけれども、もし被災のことを語るという場面があるとしたら、それを聴く人が必要であって、その聴く人こそが大切であるならば、分からないけれども編集部のような、そういうもの。それは被災の体験を何十年、何百年にわたって聴き続けるようなアクションだといいのかなと少し思ったりして。

小さくていいと思うんです。とてもささやかでも、聴き続けるというようなこととこのをちょっと思ったりしていました。

○本江副委員長

ありがとうございます。それぞれ重い話でもあるし、考えさせられるものだと思います。抽象度を上げていこうとか、死を考えると。

何かメモリアルに関する建前ベースで語られるようなこととは何か違うことも真摯に議論をしていけるといいなと思います。

もう最初から、この4段階のフレームなんかどうでもよくなってるんだけど、何かほかの話もあれば教えていただければと思います。どうですか、今の直接その場の体験、例えば映像はつらいけど写真を見ていましたとか、それで言えば、僕は生で津波の水を見てないですよ。僕は山の方に住んでいて、停電してたからしばらくして電気がついて初めて映像で見たので、何か遠くで起こったことのような、夢のような感じがして、だからリアルタイムで違う場所でテレビを見て、今まさにニュースで見ていた人ともまた違う、その場にいたからこそ情報を受け取れなくて知らなかったという感じはあって、あの落差みたいなものほどこかで何か罪悪感とちょっと違うんだけれども、何か居合わせることができなかった感じみたいなのは、僕に何かちょっとトゲになっているところはありますね。それは個人的なことで申し訳ないけれども。どんなことでもいいです。

○遠藤委員

今お話しいただいたことにちょっと近いかなと思ったのは、人が伝える、人もリアルで伝える、映像で伝える迫力として、人が伝えると伝わりやすいというのがあると思って、データで見せるのもあると思うんです。人で伝えるというのがシーンのあたりと共通なのかなと。

あとは抽象度を上げるのあたりで、東日本大震災と仙台だけじゃなくて、やはり国内の災害とか海外の災害という過去とこれからどんどん災害が起こってきて。なぜそう思ったかという、東日本大震災の後に熊本とか広島とかの支援に行く機会があったときにも、やはり全然伝わってないなという思いがあれば、東日本大震災のときに阪神・淡路で自分は何もできなかったからということであって来てくれたりとか、JICA 経由でいろいろな方が来てくださったりという、全然伝わってないなと思う反面、すごくエネルギーをもらえたということもあったので、ある意味では客観化にもなると思うんですね。仙台のということも大事だし、そこまたつながるのが抽象化とか客観化とつながるのか。人間はやはり地球とか自然とかの一部であって、命があって暮らしがあるということをお願い直すというか、楽しく便利な生活をしているかもしれないんですけども、その中で人間って何だろうみたいなことを問い直すような、見つめ直すような場でもいいのかなと思っているんですね。

私も東日本大震災のときに親族が被災して大変な部分はあるながらも、自分が地球だったらとちょっと擬人化して考えてみたんですけども、私が地球だったら、この震災って全然当たり前じゃんというか、分からないですけど、ちょっと髪をかき上げたくらいのことかもしれないなと思ったりとか。やはりそういった抽象化したりということもできる施設だったり拠点だったりするといいのかなと思いました。

○野家委員長

今、遠藤さんの話に地球という言葉が出てきたのでちょっと触発されたんですけども、哲学の方は本江さんに任せて、この前テレビ番組で、3・11のときの夜空という星空についての番組がありましたね。あれに私の友人で、元の国立病院、今仙台医療センターのお医者さんで岡崎先生という方が出てきて、彼はそのときの星空について、自分の体験を交えて本を書いているんですけども、要するにいろいろな人があの日夜の星、つまり電気が全部消えたからはっきりと今まで見えなかったような星も見えるようになったわけですけども、いろいろな方が星空について感動や感銘を語っているので、それはやはり人間も自然の中で、しかも我々は何千年、何万年と星を見て方角を知ったり、そういうことをしてきたわけですね。それがだんだん都市化することによって、そういうこともしなくなったし実際できなくなったということ、もう一遍、つまり我々が自然の中にいるということ、あの3・11というのは思い出させてくれたというか、だからそういう意味では、もう一遍、施設をつくるにしても3・11の夜の星空を思い出させてくれるような施設でありたいというふうに僕は思っています。

○本江副委員長

ありがとうございます。あの日夜の星空。星について語る言葉ってそんなに豊かに僕らは持ってないようにも思えますが、それぞれいろいろ話された、僕はその番組を見てないですが。

○野家委員長

いろんな方がさっきの岡崎さんの際に出てましたけれども、あと愛子のプラネタリウムで、そのときの星空を再現しているようですね。だから、そういったことも含めて何かこの施設のいろいろなあり方を考えたらどうかなと思ったのと、あと続けていいですか。

もう一つ、施設をつくるからには、やっぱり 1 回見て終わりという箱物だとそれで終わっちゃうんだけれども、リピーターが来るような施設でありたいというのと、外国の方とかほかの県の方が仙台を訪ねて来られた時に真っ先に案内したいような施設でありたい。仙台には青葉城はあるけれども、あれは石垣だけでお城はないんです。だから、どこかに連れていくとなると松島とか平泉とかになっちゃうんだけれども、そうじゃなくて、やはり仙台市内の中にそういう東日本大震災の記憶を留め、さらにそれを追体験できるような施設でありたい。そのためには、箱物というストックではなくて、そこに人の流れができるような、フローをつくり出すような施設であるべきではないか、そんなことを考えました。

○本江副委員長

ありがとうございます。そのためにはどうしたらいいでしょうというのが、例えばコンセプトね。であれば、フローがあるといい。あるいは外国の方も来られる、リピートできる、繰り返し訪れるということだとすると、そのために録音機能を省いて小さくしました的な意味で、どういうふうにするとみんながリピートできるだろうかというところまで出さないにつくれないから、ここからもうちょっとこちらの今日でいうところのコンセプトレベルの話もあわせてできるといいなと思いますし、無料でやらないとだめだねとか、いやちゃんと金を取ったほうがいいみたいな話も、それはむしろコンセプト的な話に入ってくるのかなと思います。いろいろなレベルで。

○野家委員長

一つだけさっきのまとめで、全体に関わる事項の 2 番目、過去の事例に学ぶで、遠藤さんが戦災復興記念館を教訓にして考えてはどうかと言われた。教訓にもプラスの教訓とマイナスの教訓があると思うんですが、その辺をもうちょっと展開していただけると参考になるかなと思うんですけれども。

○遠藤委員

あの仙台もそうなんですけど、私この前名古屋に行ってきて、名古屋も地下鉄の駅のすぐ隣のビルの上のほうに、復興のアーカイブ的な施設があるんですね。そこもほかの階と周りはずごくにぎわいがあるのに、そのスペースだけシーンとしてるんですね。ですから、記憶が展示はされているんですけれども、何か息づいてないという感じがして、よく言えば敬虔な気持ちになるかもしれないんですけれども、ちょっとそれだけではなかなか来ていただけないんじゃないか、さっきのリピーターというんでしょうか。ですから、そこをもうちょっと工夫して、前回出たご意見のようなことが入っていくと、そういうこともないんじゃないかなと思うんです。

戦災復興のものを私も何か所かたまたま拝見する機会があったときに、かなりある

意味、面としての戦災を伝える要素が多くて、やはりストーリーを伝えていないとか、人のことを余り扱っていないようなところが多いんじゃないかなと思っています。焼け野原になって、その後どういうふうハード的に復興したかというような記録が多いかなと思います。

○大泉委員

大泉です。「かくありたい」のところはシンプルなんですけれども、犠牲、困難を繰り返さないために私たちはこういうものをつくるんだということ、またはそういった犠牲を無駄にしないというのが、やはりベースなんだと思います。

とはいえ、何となく今の話でちょっと感じていたんですけれども、そういった深い思考とかと裏腹なんですけれども、安っぽい教訓がちゃんと持ち帰れるという悪いですが、安っぽいの意味を誤解してほしくないんですけど、分かりやすさとか、何かヘビーなものを背負っちゃって身動き取れなくなるのではなくて、じゃ私は今からこれやるんですよねというような明快さも必要ですし、それって下世話感とか、こういったテーマを言いながら何だかなと思うんですけれども、エンタメでないとな分人は繰り返して来ないので、何かありがたい施設になっちゃって縁遠くなるくらいだったら、毎週行っていると楽しいよねみたいな、楽しい話ではそもそもないんだけど、それぐらいのことを我々は先回りしておかないと、何かありがたがられて押し倒される施設をつくっちゃうと、願う形は結果は得られないのではないのかなと思うので、そういう両面性は必要なんだろうなと思います。なので、人が集うというシーンですね。あえて言うと、集客がちゃんとできるというのは大事だと思います。

悩ましいなと思うことは、ちゃんと見せるとか、先ほど皆さんが言った言葉で追体験ができるとか、それはビジュアルなのか写真なのかあれですけども、でもそれを突き詰めると、被災当事者の人がやっぱり思い出されてつらいとか、被災者の人が入れない施設になりはしないかなという悩ましさを僕は常に思います。やはりしんどさを伝えたいし、あのときどれだけだったかというリアリティーも大事なんですけれども、それをやり過ぎると何か当事者にとってはつらくてたまらなくて、入り込めないというのは我々の願いなのかなと思うと、見せるとか追体験というのがどこまでやっていいのかというのは、これば程度問題なのか、ちょっと悩ましいなと思います。

そこに書く前に書いていたのは、そもそも大事なのは震災の全体像が分かるとか、しんどさが、あのときどれだけみんなが大変だったのかというのが分かるというのは大事だと思うんですけれども、今言ったとおりそれをやり過ぎると本当に大変だった人たちが来られないとか、または大事な要素で皆さんが言っているのが、最後ですけども「話す」と「聞く」がちゃんとクロスしているシーンというのは、多分誰かが、経験者の人が多分話している。それをいろいろな人が、多分主に外から来た人が聞いてくれるというようなのがたくさん行われるシーンというのを願うんですけれども、展示なのか何かをやるときに、展示がある前提で今しゃべっていますけれども、余りビジュアルとかでやり過ぎると、話してほしい人が来づらいのかなとか。または、もうそういうのは無しにして、全てが口伝で行われることを前提にしたほうがいいのかとか、もうビジュアル無しみたいな、写真も動画も無し、ジオラマも無し、でも人の話だけがというのがありなのかなとか、ちょっと自己矛盾ですけども、そんなことを今の皆さんの話を聞きながらちょっと考えさせられました。

でも、何かやはり下世話感とかエンタメとか、あえて集客と言ってしまおうとか、そういう感覚、多分言葉には出てこないと思いますけれども、パンフレットにはそういう言葉は多分つくっても出てこないと思いますけれども、やはりそういうのも一方でない、つくったけど誰も来てくれない施設になるのは避けたいなと思っていました。

○本江副委員長

それは一周回ってというか、あえておっしゃっていると思いますね。

○佐藤（翔）委員

大泉さんがおっしゃったことの前半に関連する話になるんですけれども、メモリアルという言葉、いろいろな捉え方をしていると思うんですけれども、私の中では災害があったことを伝える、被災そのものを伝えるということに重きを置きたいですね。そうすると、前回も申し上げたんですけれども、やはり現場あってこそだと私は思っていて、やっぱりあのことって、別に市街地中心部に震災がなかったというわけではないんですけれども、東日本大震災が津波災害が主だったということを考えると、やはり現場の魅力というのには勝てないし、それが大事だと思うんです。そういった意味で、これは大泉さんの前半の意見と全く同じなんですけれども、中心部についてはメモリアルというよりも、防災とか災害対応に特化してもいいんじゃないかと。そのやりようのほうですね、ノウハウのほうですね。

関西は、兵庫に「人と防災未来センター」があり、東京には「そなエリア」というのが有明にあります。では、西の、東の、東北のというふうに、もう1個目玉をつくってもいいんじゃないのかなというふうに思ってます。

さっき大泉さんが下世話、下世話とおっしゃっていたんですけれども、下世話と言わないための、これは同じか分からないですけれども、やっぱり災害の体験ってすごい多様なので、いろいろなことがあったということはオーケーというにしろ、仙台はこうでした、伝えたいことはこうですと、やはりシンプルなものを整理する必要があるんじゃないのかなというふうに思ったので、今お出ししました。

○本江副委員長

この全員が言えるのは、てんでのことを言うばかりじゃなくて、あるまとまった話ができるようになっていく。

○佐藤（翔）委員

そうですね、最初に、まずみんな同じことが市民として言えると。あとは個別の体験という。

○本江副委員長

何か共通の認識というか、常識というか、言葉が難しいな。でも、何かそういうものをつくる。それは被災した当事者だけでなく、これから先もこのぐらいのことは分かってということですね。

そうですね、だけこの現場との距離感というか、違いをどうつくるみたいなことで、中心部というのは、沿岸部と対にしたときの中心部に入るから、津波の現場、被

災地、津波の現場との距離をどうつくるかということはありませんね。包含してやるのか、対なのかということもイメージとしてはあると。

○佐藤（泰）委員

私は抽象的なことにこだわっていて、今分かりやすくというお話があったんですけども、分かりやすいことはものすごく大事だし、そこにみんな敷居が低く関われるということはすごく大切だと思うんだけど、ただこの震災については分かりやすいとか、そういうふうにくくれない。もう絶対くくってしまうと、分かったような気になって安心はするかもしれないけれども、それは誤解にすぎないという。そういうことがやっぱりこの震災についてはあると思うんですね。

だから、そういう意味では、分かりやすくしたり、親しみやすくするための何か方法と、その一方で、その先にある、例えば台所の上に釜神様って宮城県にありますけれども、要するに台所ですごく楽しくご飯を食べたり、そういう生活の場の上に釜神様がいて、あれは余り見たくないけど、でもいつもあそこにあって、「あれなあに」というと、「あれはね」という話があるような、そういうつくりがあってもいいかなと思うんですね。

だから、すごく抽象的で深いことを、もちろんそれを追求することが一方で必要で、それが具体的な形としてどういうふうになるのか分からないけれども、それが何か一つの抽象的なモニュメントみたいなものかもしれない。釜神様に例えるとすると。そういうものかもしれないし、そういうものについてはものすごく、少なくとも仙台でモニュメントとかメモリアルとか、そういうことを考えるときには、すごくそれを大事にしなければいけないかなと思うんですね。

そういうことをすごく深く考えて、そこで何かつくっていく。一方で、その周りで野家先生がおっしゃるようなフローが起きるような場をつくる、それを何か一つのものにしないで、ある意味分けて考えるというか、戦略的に分けて考えるということも必要なのかなということ、ちょっと今お話を聞きながら思ったんですね。とにかく想像を超える出来事で、そういうものが分からない、理解できないという、その怖さがこの震災のある意味本質でもあって、そのことを忘れちゃいけないという。それってすごく抽象的なことだから、別にくどくど言うことはないと思うんですよ。何かあるシンボリックなものを通じて象徴的に伝わってくれば、その先くどくど言うよりも、そのことを忘れないでおこうねという一言で済む場合もあると思うんですね。そのことについて詳しく知ろうと思ったら、もちろんそこから先の記録であるとかアーカイブとか語りとかということにつながっていけばいいと思うんだけど、何かそこら辺の基本的な構造を、私は一歩間違うとすごく残念かなというふうには思っていますね。

○本江副委員長

全体は知り得ないが、分かり得ないものがあるという恐れをちゃんと持っていく。

○佐藤（泰）委員

そうですね。その巨大さとか、とにかく自分の人知を超えるようなことがあるんだということ、すごく怖い話なんだけれども、でも怖いんですから、それは。怖いん

だから、怖いものとしてちゃんと伝えるということが、我々にとってはすごい重要なことかなと。

○本江副委員長

それは一方で、分かっていることをきちんと教訓として持ち帰れるようにするということと、決して矛盾することではないので、ある災害の巨大さとか、分からなさとか、いつまでも分からない、2,500人まだ見つからないとか、どこかにきついているみたいなこととかも含めて、ある分からなさを引き受けることなくして、何か覚えておくみたいなことは大きなテーマにマッチしますね。ありがとうございます。

○マリ委員

横文字と図で混ぜてすみません。マルチノードという考え方と、ネットワークとネックレスみたいなものを考えて、何かいいものがつながってありますと。ちょっとイメージを私、中越メモリアル回廊という、場所によって別の意味があるという、別の活動が分けて、さっきのお話とつながるかもしれないという。私の頭の中に、それはすごいいいなと思います。

私の視点は外国人を連れていくという、先週末もそういうことがありまして、荒浜小に行って、閑上メイプルハウスでお昼食べて、岩沼を見学してという、6時間貸し切りジャンボタクシーで語り部タクシーも使ってなかったけれども、そういうコースで初めての方、日本のこと知らないし、だから分かりやすい視点も私もちょっとあれと思ったんですけれども、何にも背景を知らない人にも出発点として最初にどういうものがあるということが大事だし、いろいろな形でフルコースならそれをぐるっと回る。仙台市内でもネックレスが貴重なものが、メディアテークとか、荒浜小学校という貴重なものがもう既にあると。そういうものがつながって、初めて来た人も今日は時間がそんなにないから、これだけ行って背景のこととかは分かります。それが今回は防災、子供が団体で来て防災目的なら防災訓練施設に行くだけ、でも時間があるとぐるっと回ることによってリピーターに、住民向けのことも大事ということはいいいなと思います。以上です。

○本江副委員長

ありがとうございます。もう既にあるものもたくさん仙台にはあるから、それを使いながら全体として回遊するものとして考える。

ブレストですから、どれかに引っかけて、じゃこういうのもあるなみたいなことをまた話していただければ。どうでしょう。

○志賀委員

さっきフローが起こるみたいなこと、あと下世話な話、ちょっと前にアメリカの美術館のキュレーターの人と、さんざん美術館でやる展示について、内容について、作品について話した最後の最後に、会場から「美術館にとって一番大事なものは何ですか」という質問が出て、そのときに彼女は即答で「おいしいコーヒーを出すコーヒーショップ」と言ったんです。それがないと絶対来ないからと言われてて、何か本当そのとおりだなというふうに思ったんですけれども、何か開かれているというのがどう

いう意味かみたいなことをそこで考えるけれども、何となく1杯500円とか600円するコーヒーだと、ちょっと私とかにも高くて嫌だけど、100円だったらみたいな。でも自動販売機じゃなくてとか、何かそういう小銭を使うみたいな、しかもそれがめちゃくちゃおいしくない絶対だめでみたいな。何かそういう、下世話というよりそれは食に関係することだし、お茶っこ飲みってすごく東北の人はするしというようなことが一つあるかなと思ったりして。

あとは、イメージというものをどう使うかという、全くイメージがなくてもみたいな話も今出ましたけれども、一つ、今日ブレインストーミングなので思い出すことは、写真洗浄、家から流出した写真を地域の人が拾って、家に帰ってそれを洗って、ほとんど破壊されてしまった公民館とか小学校とかに全部展示というよりも、見つけやすいように引っかけて、来る人が見つけて持って帰るというようなことが東北の沿岸部中で行っていて、私も北釜でそれをやりましたが、あの場というのは普段だったら絶対に流出することのないプライベートなイメージというか、それが生きてる人も死んでる人も関係なく、等しく流出して、パブリックな場になってしまったという場であって、私はそこにずっといて、何かその場というのは割とこの悲惨な現実に対抗するような場であったなというふうに思いました。

余りにしんどいから来られないという人も確かにいるんですけども、でもやっぱりその人が亡くなってしまってその人の体はない、だけれども、イメージでそれを、代理としてそれを得るといって、確かな居場所をそこで写真に求めていたということがやっぱりあって、これは本当に何かを人が表象するというもの、一番最初の動機であってというふうに、ものすごく思ったので、何かというのは写真の役割みたいなものが見事に果たされたような場でもあるなというふうにすごく思ったりはしてました。なので、被災者の人の気持ちというのを考えるときに、あながち被災者の人たちは悲惨なものをもう見たくないと思う反面、やっぱりどこかでそれに対してつながりを持つということをも求めているというのは、どこかであると思うし、それは時間がたてばたつほど変わっていくようなものなのかなというふうに思ったりして。

あと何か、すごく抽象度の高い哲学的なことと、地球レベルのこと、また人間とは何かみたいなところと、防災という意味で、やっぱり何か双子のように響き合って存在させる必要があると。双子って私の身近にすごく仲のいい人がいるんですけども、お互いのことを小さい頃から語り合っているんで、記憶がものすごくあるんですね。すごく覚えている。私、本当に2歳とか3歳ぐらいの記憶はないですけども、彼女はものすごい記憶を持っている。だから、語り合っているということで、すごく記憶が長く続いているんだなという。何かそういうふうなことがあればいいななんて思いますけれども。

○本江副委員長

ありがとうございます。双子というメタファはおもしろい。写真洗浄で、流された写真を洗って、そこにみんなが来て写真を見るという話をされたけれども、実際にそこで私たちの写真で写っている私の子供とか、おじいちゃんみたいな話もあるし、全然知らなくても何かそこに写っている人の姿とか。

○志賀委員

あと全然関係ない空とか、そういう写真もあつたりとか。あと何か、そういうときにどういふことを人は話すかという、やっぱり全然関係ない話をしたりして、震災と関係ない話を写真を前にすると話したりとかというふうな、何かそのひもとかれ方みたいなのはすごくその場では意味を成しているというふうな。だから、墓場にしちゃいけないよなと思つたり。何か見に来る人に解かれていく場でない、お墓というのは人が集いますけれども、そうではなくてそこから解かれて新たなものになつていくというふうな場だといふなと、いつも思つたりとか。

あと震災のときに、すごいおもしろい話がいっぱいあつたんです。結構これは本当に新聞でも語れないし、テレビでも放映できないような、それぐらい号泣した瞬間に爆笑するみたいなのが避難所ではわんさかあつて、そういうおもしろい話というのは私いつかまとめなきゃいけないなと思つてるんですけども、でもちょっと前にNHKで千原ジュニアというお笑いの人が、そういう話を集めて回るみたいな、聞いて回るみたいな番組があつたんですけども、なかなかやっぱりその爆笑には至らないという、やっぱり難しい、それがあつたりとかしてというのは思つたりしましたけれども。

あとさっき私、星空の話を聞いてはつと思つたんですけども、やっぱり北釜でもほとんど半分低体温で意識が遠のいてるような、屋根の上にいるというような人が、やっぱり星空の話とか、津波が去った後の海の美しさについて、語つていたんです。それを二、三日たって再会した避難所で、他人である私に話すという、それが一つや二つじゃなくて、ものすごくあるというのは、本当に私も強烈に覚えていて、私はその意味をずっと考へていたんです。

それで、美術館に行かない、絵なんて描かない、興味ないというような人が、なぜそんなに「美しい」という言葉を使ったのか。これはもしかしたら、ある意味臨死体験だったのかもしれないし、もしくは体の中にある、人間は社会ができるということで自然から、地球から離れて人間社会の中で生き始めたけれども、体の中には大自然というか、内なる自然というのを抱えていて、それが発動したんだなという。それが外の自然とシンクロしたことで、その美しいという言葉が出たんだろうということで、やっぱりそういう次元の話というのは、悲惨な中でも、悲惨というか半分意識を失うような人がそういうことを言うということは、なかなかやはり死というものが人に与える感情とか、そういうものは大きいと思ふので、何か分からない強い力なのだということが共有できるといふですね。

○本江副委員長

今のようなことといふのは、追体験できるんですか。

○志賀委員

その追体験についても、私すごく考へるんです。特に私は芸術のフィールドにいるので、そのことについてもものすごく考へますが、ものすごく抽象度の高いもので、かつ見る人のコンディションというのもあると思ふんですけども、それがあれば引き起こされることは確実にあると思ふます。

あとは身近な人の死ですね。津波ではなくても、身近にそういう死が起こると、やはり内なる自然が外の自然界にある死というものにリンクするので、そういうとき

にはそういうことはやっぱりあると思います。追体験は可能だと思いますね。

○本江副委員長

ありがとうございます。どうでしょうか。

○野家委員長

さっき志賀さんが、美術館で一番大事なのはおいしいコーヒーなんだと、あれは大変大事だと思うんですね。僕なんかも考えてみると、やっぱりおいしいレストランとか、コーヒーショップとか、あるいはミュージアムショップが充実しているとか、そういうのだとリピーターになるんですね。だから、むしろ今度はあそこのレストランで何か食おうと言って、ついでにそういえばこんな展示をやっているんだというので見ても、それは全く構わないと思うんですね。

だから、そういう何か目玉になるような、つまり子供がそこで遊べて、同時に大人が楽しめるような施設であると、リピーターが増える。だから、防災でも、四角四面な防災教育みたいなものじゃなく、例えば子供が、今防災カルタというのがあるんですか。あんなのでゲームができるとか、そういうときに大人はコーヒーショップに行っておいしいコーヒーを飲むとか、天気の良い日ならば外に出ると、その周りで蚤の市をやっているとか、そういうことで人の流れをつくるということによって、リピーターを増やすような何かアイデアが出てくればいいかなと思うんです。

ただ、それだけでは足りないので、やっぱりどこかにその施設はやはり追悼、亡くなった方や被災された方の追悼のシンボルというのがどこかにモニュメントとしてあるべきなので、それを通じて親と子が体験を共有する。だから、子供が遊んでいて「何か不思議な形をしているのは何なの」というふうに親に聞くと、親が「これは実は何年前の震災のときにたくさん亡くなった人がいて」というような話をすることによって、次の世代にそういう震災の記憶とか体験を伝えていくというか、そういう二重の機能を果たせるような施設が望ましいかなと思っています。

○本江副委員長

広島のパークなんかは、式典のときは何か強烈な軸線の空間になりますけど、普段は普通の公園で、割とうだうだ、ぶらぶらしていますけれどもね。何かああいうセットアップの違いで、何か特別な空間になる。やっぱり居住まいを正さなくてはいけないという瞬間もあるけれども、普段は凧上げていたり、何させてもいいみたいな感じになっているのは、何かそういう両義性みたいな。そんなような場だとか。

そういう多分何かシーンのイメージもあって、ある種不謹慎なことはすべきじゃないと言えばそうだし、何かそういう設計にして、そういう場に追い込むと、何かちょっときりっとした格好して、何か大きい声を出すと子供が叱られるみたいなシーンとしてつくるということもあるし、何かそんなことはよくて、ただお茶飲みに行くとか、近所で一番リッチな空間だからとにかくそこに行くとか。でも3月が近づくと、ちょっとそういう感じになるとかいうようなことでもいいのかみたいなことで、何かその設定のシーンのつくり込み方にかかってくるなというふうな思いがしますね。

いろいろなことをそれぞれ言っていたいて。

○遠藤委員

先ほどリズさんがおっしゃってくれたネックレスに関係するかなと思って。前回も出ましたけれども、被災地連携の話で、ちょうど今回 3・11 があったので、そのときにちょっとしたイベントをやったときに、来てくださった方にまさにこのメモリアルのことを皆さんどう思いますかと投げかけたら、岩手の活動をされている方が、小さな町とか現地では、もうアーカイブすることすら大変なんだから、仙台市あたりが、どかんとまとめてアーカイブしてくれたらうれしいなみたいなことを言われたんですね。私はそれを言われて、あ、そういうことをやっちゃだめだなと返って思ったんですね。そうやってほしいと言われたんですけども。でも、そういうことをやっちゃだめなんじゃないかと、言われて初めてそう思って、やっぱり現物は現地にあるのが一番いいんじゃないかなと。そういう意味では、借りたりコピーをしたりデジタルにしたりとか、そういった形で収集するのはもちろんあるのかなと思ったんですけども、やっぱり現地性みたいなことを尊重しないと、奪ってしまうというんですかね、そういうことに加担するようなことにもなっちゃうのかなと思って、現物はやっぱり現地がいいのかなと。

そういう意味で、小さな自治体はなかなか大変なんだよなんて言われて、そういうことではアーカイブ研究とか、アーカイブ支援みたいなことを何かできるといいのかななんていうことを、被災地連携の一つとして。そういったネックレスの。

あとまたもう一つの視点で、この前、河北新報さんにも書かれていたんですけども、震災のお遍路さんの活動があると。新妻さんたちがされている、福島の新地の方が中心になってされている、そういうネットワークの事業とかもあるので、ネックレスにネックレスをどんどんかけていけばゴージャスになるのかもしれないんですけども、既にあるネックレスを大切に、何か連携をしていけるといいのかなと。そうすれば余りゴージャスになり過ぎることはないんじゃないかなというふうに感じて、被災地連携とさっきのネックレスのお話です。

○本江副委員長

仙台にあるものだけではなくて、いろいろなところでいろいろな取り組みがありますからね。そういうものをつなぐということは。

○佐藤（翔）委員

今の遠藤さんと全く同じで、仙台にもうとどまらなくていいんじゃないのかなというふうに思います。もう宮城県全体を視野に入れていい。もっと超えると、政令市は東北には仙台しかないの、もう 3 県を視野に入れてもいいと思っています。

○本江副委員長

ワールド防災フォーラムをやるんだから、世界中の、自然災害があったらどうしたらいいのと、みんなが仙台のほうをちらっと見たときに、「ちょっとこれね」というようなことでもあるんですね。仙台のフレームワークですから。

どうでしょうか。

○植田委員

それに関連して、今お話を聞いていて現場というものの捉え方にいろいろなお考えがあるなというふうに思うんですね。例えば沿岸を現場というふうに捉えるという考え方もあると思いますし、市街地は現場ではないから発信に徹する場として機能分化するとか、そういう考え方もあると思うんですけれども、一方で仙台市で震災のときの聞き取りをしたことがあったんですけれども、この市街地も現場だったんですよ。沿岸の人たちのサポートがいかにかにできるかというふうなことですごく動いていらっしゃるって、メディアの方なんかでも本当にそういう動きをされていたかと思うんですけれども、ここも現場ですし、仙台市が沿岸にできることってすごくあると思うんですよ。

だから、沿岸もあれば市街地もあるというふうなところを持っているというのが、仙台市の一つユニークなところでもあるかなと思って、完全に発信に徹する、現場ではない場所というふうに徹するというお考えもあるかと思いますが、ここも現場であり、沿岸を支える現場であるというふうに捉えるお考えと、何か二つあるのかなというふうに思ったんですけれども。

○本江副委員長

それは大事なことですね。メモリアルの検討委員会のために、山の方にもたくさんの被害があったことを忘れないでと、繰り返し繰り返し書いているし、実際それで、あそこまで被災地で自分はそうでないみたいな線引きをついしたいとか、深刻さを目の当たりにすればするほど、うちはまだずっとましだったみたいにして、ここで線を引いたりという感じはありましたけれども、でも冷静に見れば皆グラデーションはあるけれども、全て被災地ですというのはそのとおりだと。

○植田委員

何かサバイバーズギルトみたいな心理も手伝って、何かそうなりがちだなというのは。

○石垣委員

いいですか、今のお話に。それが逆転する可能性も十分に今後の災害ではあり得る。今、東日本大震災というところで津波の被害というのが一番大きいという話はあるんですけれども、じゃあここで首都直下型の地震が起きたら逆転現象が起きるであろうということはある、そのメモリアルというところで津波に基本スポットを当てて伝承して行って、これは地震が来たらこういうことが宮城では定期的に起きてきて、千年に一度はこのくらいの大きさのものが来るんだということだけが印象に残ってしまうと、例えば利府長町断層みたいなところも今後十二分にあり得るというところまで、どういうふうにカバーするのだろうかというのは、ちょっと今皆さんのお話を聞いていて抜け落ちがちのところなんだろうかと思いました。

○本江副委員長

どうしたらいいですか。その The3・11 の話と、それ以外のこともたくさんあるし、先生のおっしゃった、もっとすごい被害のことがあり得るとみんな思っていて、それが遠からず起きた後、これは昔こういう、まあまあ大変な時代があったけど、20XX年

の東京のことを思えばみたいな話になるのかとか、その辺もありますよね。そのぐら
いは何か構想の中には入れておかないといけないかもしれないですね。

○志賀委員

今そのことで言うと、本当にそうだなと思っていて、というのは私がもしあのとき、
子供の頃から悲惨な世界のあらゆる出来事をテレビを通じて見ていて、何も感じなく
て悲しいとかびっくりとか、そういうのはあるけれども、肉体を伴わずに見ていて、
どこか不感症なまま何か大人になっていたということがあったところでの私は震災だ
ったので、いかに自分の肉体と共に見るということで、それがこういう形で病むとい
うことに深刻なことにならなかったというのを痛感しているのです、だからその逆のこ
とをやっぱり思っていて、そういういろいろな情報や、そういうたくさんのメディア
によってああいう悲惨な状況のものをただ見るという。それが、じゃあこうしなきゃ
いけないねと、防災の活動のほうにすぐつながればいいけれども、それによって何か
引き起こされた日本中、世界中の、もしくは今まであったことが私たちにもあったと
思うんだけど、現地にいない人間たちのまだ見ない現実のトラウマの抱え方みた
いなところが、ものすごく今の社会の複雑な問題につながっているような気がしてな
らないですね。

だから、何かそれが防災という形に現実的につながりつつ、でももっと大きな社会
の何かを覆うような雰囲気みたいなものになっているとしたら、なかなかそれはとて
もつらいことだなというふうに思うし、震災を目の前で何百人も亡くなっているとい
うような状態を見て、何が変わったかという、やっぱり今世界中で起こっている災
害だけではなくて、戦争とかテロとかというような状況が、これぐらい多分とっても
大変だろうという想像がつくようになったという、その想像の範囲が広がるという意
味では、皮肉けれどもそういうことがある。

だから、そのジレンマをどうしたらいいんだろうというふうには思いますよね。だ
から、何かそういうことも抱えるという意味では必要かなというふうに思いますけれ
ども。

○佐藤（翔）委員

今のを少しだけキーワード化してみますけれども、要はそこで生き残れるかどうか
ということがまず大事だとすると、人として生き残れる力、生きる力とか、危機管理
能力を高めるということにすると、実はターゲットが災害だけじゃなくてテロも戦争
も入るし、普段の危機もあるわけですね。不況になるとか、そういうのもお客さん
として抱えることができるか。これは主に外部向けになるかもしれないですけども、
ここに来ると、人間として強くなれるみたいなのところもあってもいいのかなというふ
うに、聞いていて思いました。

○本江副委員長

だから、ある種の悲惨さ一般、そんなものがあるのかどうか分からないですけれど
も、ある意味の災害というものが、何かそういう悲惨というか、つらいことの一般み
たいなことに、経験が全くないと絵空事としてあるわけだけれども、今おっしゃった、
あれを経験するとその先にあるものへの共感する能力がつくというか、そういうプラ

グができるみたいなどころがありますよね。

○志賀委員

やっぱり震災後にあらゆるものの価値みたいなものが、全部 1 回フラットに破滅した後、いっぱいいろいろな価値がまた出てきて、それによって病んでしまった人もいた。それによって自分で死を選んだ人もいたというようなことを考えると、なかなか本当に難しい複雑なことだと思っていて、そういうことが実際にあるという。何か生き生きとした、例えばどこから水を汲んできて、どこから食べ物を、トイレはどうするみたいなことというのは、体の行動が伴っているの、とても生き生きと、緊急だとしてもやっぱり体は動くという。何かそういうことを訓練しつつ、それがいざ無いということも考えつつ、その後のものすごく長い長い時間という、段階に分かれるなんていうふうにも思いますけれども。

ただ、やはりその後の社会の価値のあり方、あと社会のあり方、復興という名のもとに行われたあらゆる経済活動によって病むという、自分の物語を失う、自分が誰か分からなくなるということはあるので、それはとても悩ましいというか、本当にたくさんジレンマがあるなというふうに思います。

○佐藤（泰）委員

これは野家先生の前で言うとあれですけども、何かやっぱり誰でも不安ってあるじゃないですか。自分がいずれ死ぬかもしれないということに始まり。そういうさまざまな不安とある意味闘いつつ、それを忘れながら、あるいはその不安を打ち消すための努力をしながら生きているわけですね。その中で震災の経験というのは、まさにその不安を押しつけられてしまって、それに打ち勝てないような不安というのが目の前にあらわれて、そこから逃れられなかったりして押しつぶされてしまうような、そういうことが多分あったと思うんですね。

ただ、それは別に震災のことに限らずに、人間誰もさまざまな不安を抱えて生きていて、その不安と向き合って付き合いつつ、でも日常を楽しくやっていけるかみたいなことというのはすごく、それぞれの根本的なテーマだったりすると思うんですね。そのときにそういう状況が前提としてあるときに、震災のことに向き合うのは、普段見ないようにしていた不安が増幅されて、とてもつらい思いをしたりとか、そういうことがあるわけだし、だからそういうものを本当は見ないようにして明日も大丈夫だろうと思って生きていけたほうが幸せなわけだから、そういうことが根本的に、これは誰もが抱えている問題であって、震災について考えることの難しさというのは、そこにある意味つながっているというか、人間が誰も抱えている不安とどう向き合えるのかという、不安をどうマネジメントするかみたいなこともあるかもしれないけれども、そこを仙台でメモリアルみたいなことを考えるときに、どういうふうにそこを捉えて設計するのかということは、結構重要だったりするのかなと。今ちょっと話を聞きながら思いました。

○本江副委員長

この不安とか悲惨さと向き合うみたいなことがあって、それは大きな悲惨さと不安を、少なくとも生まれて最高レベルのやつをみんなですべて同時に経験したから、何かシン

クロして話せるみたいなことがあって、何かそれをちゃんと引き受けて共有していけるような、何かそういう拠点がとは思いますね。何かこの間から出ている言葉で言うと、災害文化とずっと言っていて、何か災害を受けたことによって持つ文化ですね、大きい不安だったり悲惨さだったり、ある種の物語をつくり出すみたいなこと、何か文化的な出来事がある、それにどんな逃げ方がある、それをどう我々はあのときは克服したり、あるいはいまだに引きずっていたりするというようなことをちゃんとあらかじめ整理することはできない、整理し続ける活動なのかも分からないけど、何かそういうものをつくって、それを世界と共有していくような活動というのは、すごい抽象度が高いけれども、何かやることとしてはあるのかなという感じがしますね。そのためのメディアはまたたくさんあるんだろうと思います。

いろいろなレベルのものでいきましょうか。

○遠藤委員

ちょっと今のお話と少し関連するかなと思ったのが、メディアテークさんでいろいろな個人の方とかの記録も集めてらっしゃると思うんですけども、何かそういったことをもっとグループとか組織とか企業とかまで広げて、意識的に、今度10年というのが迫ってきているので、やっぱり振り返られなかった方も、そういうきっかけになる人もあるんじゃないかなと思ったんですね。そういうグループや組織やコミュニティーが震災の振り返りとか記録を発表したり展示をしたりとか、あとその支援を、例えばいろいろな社会教育施設とかでももう少し支援をしていただいて、それが10年だったりメモリアル拠点というところに、何か生きてつながってくるような。だから、拠点ができる前だからこそやっておくべきことというのを、もっともっと意識したほうがいいのかなんて、ちょっと思いました。

企業もいろいろな取り組みをされているので、そういったものもすごく学びとしても、教育のところにもつながってくると思うんですね。

○佐藤（泰）委員

メディアテークの名前が出たので、何か言わなきゃいけないかなと。

○本江副委員長

ブレストだから、ポジショントークは無しで。

○佐藤（泰）委員

そうですね。いろいろな記憶をいろいろな形で語り合ったり、それを残していくことはものすごく大事だし、今それをやらなければどんどん忘れられていくという中であって、緊急の課題なわけですよね。それはただすごく大変な作業なので、それを誰がどういうふうにやるのかというのは、方法論を本当によく考えていかないと、せっかく集めても何か使えないとか、分からないとかなることは往々にしてあるので、そのためにはやっぱりそのことについてどれだけの専門家がこの世界にいるのか分からないけれども、本気でそういうことをちゃんと残していくための技術とノウハウを持っている人たちを集めてやっていくことというのは、すごく私は大事だと思うんですね。多分仙台はそれができるかもしれない。まあ、できないかもしれないけれども。

でも、唯一東北の被災地の中では、それに挑戦する義務は少なくともあるかなと思うんですね。

そういう作業を一方でやっていって、それに対してもう本当に地道でなかなか成果がすぐには分からないようなことも含めて続けていくような継続的な活動というのが一方でありつつ、その成果について何か1年後、2年後、3年後のレベルでは判断しないという、これは100年後、200年後に向けてやっているんだという、そういう覚悟みたいなものが、私は一方で必要だと思うんですね。それがないと、1年後2年後に、あれどうなったの、成果を見せてよとかと言われても、そんな簡単にはできない。それはもう本当に気の長い作業になるということも、前提として必要だし。

あともう一つ言いたいのは、見えるようにしなければいけないんだけど、私は全部見えなくても、1人の人が全部見えなくてもいいと思うんですよ。無理なんですね。これを全部見るのは無理。本当に一人一人、被災地で本当に現場で災害を体験した人もいるし、場合によっては東京にいたんだけど、そのことですごい衝撃を受けて、それ以来、いろいろな精神的な問題に向き合っているみたいな人だって当然いるわけですよ。そういう人だって、ある意味当事者じゃないですか。そういう人も含めて、今いろいろな立場、いろいろな状況の中でそれぞれ語っていた、もう無限にある、もう一人一人無限にあるみたいな。そういうことになっていったときに、それを全部読めないからだめだということではなくて、読めなくていい。ただ、誰かが誰かの言葉にアクセスして、そこから何か感じることであればいいくらいのことで。一般の人をぱっと見たときに、じゃ何が見えるかといったら、霧のようなものが見えるという。何か要するにアーカイブ、いろいろな記録がうわーっとあって、もう無限にそれが広がって煙のようにもくもくとして、近づいてよく見ると、ああ何かこんなことあるんだみたいなこと、何かそういうものとして把握してもらえる、体験してもらえるようなものですらあってもいいかなと思うんですね。

○本江副委員長

人はどうしてその霧の中に入っていくんですか。怖くないの。

○佐藤（泰）委員

怖いですよ。

○本江副委員長

普通はちょっと怖いから近づかないようにしておきたいという、何か黒々とした闇のような場所になってしまって、何かみんなが敬遠して遠ざけることにならないで、それこそコーヒーぐらいでは釣れない気もしますが、どうやっておいでというのを、あるいは入ってみよう誘うのはどうすればいいんですか。

○佐藤（泰）委員

やっぱりそれが黒々としているんじゃなくて、きれいなんだと思うんですよ。例えばあの日の夜の星空がすごくきれいだった、あの星空きれいだけれども、でも人によってはそれが暗闇の、もう闇の中の体験、だからこそ純粋にきれいだと思ったということも多分あると思うんだけど。そういう本当に純粋な美しさみたいなものとし

て表現できていれば、何か知らないうちにうんと近づいていってしまうということは、私はあるかなと。それが恐ろしげである必要はないと思うわけです。

○佐藤（翔）委員

さっき佐藤さんがおっしゃった100年の話で、100年を見越して直近で評価しないみたいなものの例として、どこかで話したことがあるかもしれないんですけども、長崎におまんじゅうを配る行事があるんですね。何でおまんじゅうを配っているかというのと、江戸時代に土砂災害が起きて、その人たちを弔うために町内会で家が持ち回りで、月に1回まんじゅうを配るというのを江戸時代から続けていると。月1回、毎月毎月です。すごいですよね。すごいです。

もっとすごいことがあって、長崎豪雨というのがあるんですよ。1983年だったかな。そのときにまた土砂災害が起きるんですね。そのときに隣の集落は犠牲者が出ちゃうんですよ。でも、そのまんじゅうを配っていたところは犠牲者が出ないんですね。だから、100年後評価みたいな、評価というと恐縮ですけども、そこで結果が出るんですね。何でこういうことを言ったかというのと、そこに書いてあるんですけども、ネーミングが「念仏講まんじゅう配り」というんですけども、念仏講まんじゅう配りを超える何かそういう行事をつくってほしいなということで、触発からの願望で書きました。

もう一つ、うらやましいなと思うのが、やっぱり阪神なんですけれども、前回も私は人と防災未来センター自体には余り住民の人は行っていませんと言ったんですけども、ただつながっている部分があって、「しあわせ運べるように」という歌があるんですね。それは神戸市民、小学生から教えられて全員歌えるわけですよ。そういう何か全員できることというの、拠点には必要なのかなと思って、共通の歌とそこに書きましたけれども、それも「しあわせ運べるように」を超えたいということで書かせていただきました。釜神様系になると思うんですけども。

○野家委員長

今100年ということがいろいろな方から出ていて、最初は100年間の予算というところから、そういう何か歴史感覚というのは非常に僕は大事だと思っているんですが、震災のときに言われたのは、今度の震災の規模の災害というのは400年前に慶長の大地震と津波があって、さらにいくと貞観の大地震と津波というのがあった。だから、慶長の大地震のとき、南小泉にある浪分神社まで津波が来たんだということ、貞観の大地震のときは、多賀城の「末の松山浪越さじとは」というのはそれに基づく。だから100年ではなくて、むしろ400年、次の400年に向けて、多分次の400年には利府長町断層が暴れ出すかもしれないし、実は私の家は利府長町断層の上にあるんですけども、そういう100年と言わずに400年単位で考えるぐらいの歴史感覚というのを、この施設をつくるときに頭の片隅にでも置いていたらいいかなというのと。

もう一つは、さっき佐藤さんが企業との協力ということを言われたんですけども、そういうことを社会学で研究している方の論文を僕は読んだことがあって、米沢の上杉鷹山に、正確に覚えてないけれども、自助・互助・公助という概念があって、自助というのは自分でできること、まず自分の身を助ける。互助というのは隣近所で助け合う。公助というのは自治体とか国とか、江戸時代であれば藩とか、そういうところ

でのサポート。それがうまく組み合わせられて初めて、災害に対する対策が取れる。

それに対して岩沼では、あそこはいろいろな企業が入っているので、震災のときにはその企業が率先していろいろなサポート体制とか援助のシステムをつくったようなんですね。それをむしろ今後の災害に向けて組織化できないかということの研究している方がいらっちゃって、それは共助と呼んでいたんですけれども。だから、そういう災害のときのサポートシステムというものをいろいろな形でこれから組み上げる上で、この施設がネットワークの一つの核になって、今後のことを考えていければいいのかなと思いました。

○本江副委員長

そういうことについての知見というか、そういうものを考えるヒントとか、きっかけを与えるとか。

メモリアルの活動を考えると、今こんな視点というか、トピックがいろいろありますねということでは、いろいろな大きさの話が出てきて、何ら収斂を見ないという感じになって、それは我々委員の知ったこっちゃない。いろいろなことを言って、まあこんなもんだらうねというふうにしたいと思っている人の鼻をほじくり回すというのが、我々の役なので、400年分やるとか、分からないほうがいいというか、そういうような感じでぶん投げるとい感じなんですけれども、いい感じでくたびれてきたのと、もうちょっとで時間なんですけれども、まだ今日は全然まとめるつもりも何もないので、いろいろ出たねと、困ったねという感じで終わっていいんですが、今の話の中で何かもうちょっとこういうのというのがあれば。脈絡は何もなくてもいいので。貼り付けておきたいものがあれば、どうぞ。

○植田委員

貼り付けておきたいものとして。皆さんのお話を伺っていて、共通項としては、何か災害には勝てないんだみたいな、いざというとき私はもう負けるみたいな、何かそういう思想というのは共有しているんじゃないかなと思ったんですよね。そのときはもう助け合うしかないし、もう頑張るしかないみたいな。例えば、私、河北新報さんとかでお話を聞いたときも、新潟日報さんとかと協力して何とかど根性で新聞を翌日に出されたとか、何かむしろ助け合うためにどうしたらいいかというか、もう絶対頑張っても、技術とか、何というかテクノロジーなんかでは乗り越えられないものだという、そういう前提で仙台市で生きているというか。そういう何か災害には勝てないみたいな思想を持ったような構えというのは、一つ何か共有できているのかなと、ちょっと適当なことを言っていますけれども。

○本江副委員長

敗北主義。

○佐藤（翔）委員

専門上、負けることはできないので、災害を回避したり、乗り越えられる人。だから勝てる勝てないの文脈が違うだけだと思うんですけれども、災害は起きると。起きるけれども、それを乗り越えることができるということですね。

あと、自然からのキーワードになるんですけれども、あくまで自然現象の一つなので、災害は災害じゃないときもあるんだよと。一連の地球の活動の中で、人間がそこに住んでいるんだから、それと付き合わなければいけないということが大事なのかなと思って、一応立場上、申し上げました。

○本江副委員長

災害にしちゃうことがあるんだけど、しないで済ますみたいなことはあるということですね。どうでしょうか。

○遠藤委員

脈絡は今の流れには沿ってないんですけれども、来場者イメージ、拠点の対象者ということ考えたときに、いろいろな皆さんの話を聞いていると、余りじゃ市民は行かないのが前提なのかなとか、何か行きたくないという人が多いのかなとか、私も揺れながら聞いていたんですけれども、でも、私も地域の人たちが振り返って自分なりの何か教訓を持ってほしいというのもあったときに、やっぱり数は少なくとも市民に行ってほしいと思うと、シーンのところですかね。

市民入場割引みたいな、お客さんを案内してきた市民は無料ですみたいな。ちょうど私、つい最近島根に伺ったときに、その案内してくれた友人が、「もうここの施設に今週3回目なんだよ」と言ったんですね。「でも、すごく気に入ってる場所だから、見てもらいたいんだ」と言われて、そうしたら何か証明書を見せて名前を書くだけで、町民の方は無料なんですよね。それで彼は全国にお友達がいるから、もうどんどん連れてくるんですよ。だから、そういう連れていきやすい、一緒に何回も市民が来場しやすい仕組みというの、何かあったらいいのかなと思って。

○佐藤（翔）委員

今の遠藤さんの件で。僕はそれを両立しているのが広島だと思います。広島は全国からもそうですけれども、海外からもお客さんがたくさん来ていますし、市民参画もあるわけですね。それを両立しているのが広島なので、超えたいシリーズで恐縮ですが、広島を超えたいということで書かせていただきました。

○本江副委員長

さっきの遠藤さんが言われたのは重要で、何となく俺たちは知っている、みんなまだ知らないから教えてやるみたいな構えて、ちょっとあるかもしれないね。それでいいかというのは、あるような気がしますね。俺たちにも分からないからというのも、あった気がするね。

○佐藤（泰）委員

言い忘れたというか。言っておきたいみたいな。こういうコンセプトの段階でいろいろ議論することというのはすごく重要で、このメンバーとか、今会場にいらっしゃる方々は共有できている部分もあると思うんですが、実は私はそういうことが最終的にはこの事業、活動を継続してやっていく人たちは、多分、我々ではない。そう考えたときに、ここでの議論をその人たちが聞いていないというのはすごい大きな損失に

なると思うんですね。できれば早い段階で、こういう議論に立ち会っていくような、将来その事業に関わっていくようなスタッフ、確実にその人がスタッフになるかどうか分からないけれども、スタッフになる可能性のある人たちが、この議論に参加するなり関わるなりしていくことというのは、すごく重要だと思うんですね。

私の例を言うとあれですけども、私は実はメディアテークの本当にコンセプトの段階から関わって、いろいろな人たちの議論を聞きながら、それを自分の中に内在化させながらやってきているので、もちろんできないことはいっぱいあるけれども、あ のときあれだけ議論したのにまだできてないなみたいなことも含めてできないことはいっぱいあるけれども、でもそれが財産なんですよね。それがいろいろな事業をやっ ていく上での大きな原動力にもなっていくし、これをやるべきなのかどうかということ を考えるときの判断材料にもなっていく。それがあるかいないかというのはすごく大 きくて、結局こういう事業を市で行うときに大体はもうやりますと決まって予算も決 まって、人員配置何人と決まってから、じゃあ誰か連れてきてみたいということになら ざるを得ない。それは事情としてそういう仕組みなので、やむを得ないところもあるん だけども、でもこの震災と向き合っていくことであれば、その限界とか、通常 のやり方を超えることも私は挑戦する意味はあるんじゃないかと。それだけ 100 年 後、200 年後を見据えてやっていくことだとすれば、そのくらいの覚悟と人の巻き込み 方というのは、やっぱり早い段階からやれたらいいなということは、ちょっと私とし ては今日のうちに言っておきたいなと思いました。

○石垣委員

最初ちょっと政治的なというわけじゃないんですけども、覚悟の問題として 100 年の予算化をお伝えしたんですけども、災害文化とか、先ほどの自然と人間みたい なところにかかわってくると思うんですけども、防災力を身につけるみたいなところ もそうですし、志賀さんがおっしゃっていたような、災害で心にダメージを受けた 皆さんがどんな過程を経て気持ちを回復させていくという意味においても、最終的に その施設に行く、施設なのか、そういうプログラムなのかを体験することによって、 生きる力みたいなものが得られるという場所、ではないかなというふうに思いました。

○大泉委員

こういったことを行政として、仙台市としてちゃんとやろうという、向き合おうと いうことにはリスペクトを表した上でなんですけれども、今の議論からすると、行政 の仕組みの限界、予算のこともありましたし、人員配置の問題もあるので、これは一 人一人がそういうことをやりたいけど、組織としてそういうものになってないんです よねというのが、いつも限界を迎えるわけですよ。

そうやってきたときに、やっぱりこれは確かに行政の施設なのかもしれないです けど、やっぱり行政施設にしないという心構えとか意識は必要なのかなと思う。仙台の 今までの経緯を考えると、市民協働をやってきたとか、市民力のまちだというのであ れば、やっぱりこの取り組み自体のつくり込みも、いかにそういったことにできる かという。我々は多分市民力が発揮された一つのプロジェクトとして、脱スパイクを 思い浮かべたりするわけですけども、あれは、行政は行政で俺たちのやった仕事だ と思っているし、メディアはメディアで俺たちがキャンペーンやったからみんながや

ったんだと思っているし、町内会の人たちは俺たちがピン抜いたんだぞとみんな思っているわけですね。タイヤメーカーは、私たちがスタッドレスを開発したんですよと言っているわけじゃないですか。結局みんな手柄を持っているというぐらい、これは誰がですか、仙台市の手柄なのか、住民が自らやったのか、みんなが手柄を取れる施設をしてあげるといつくり込みができたなら、どこにも負けない、超えるんじゃないのかなという気がしているんですけども。

○本江副委員長

これは話せば話すほど大きくなって、これをぐうっと包摂するような行政サービスを考えるというのは、何かもう土台無理というか、そういうことではないので、このようなことが起こっていくような何かきっかけをつくるか、それがしぼまないようにコンプレックスし続けるものとしてあるみたいな、何かどこかで、それはもうちょっと先のステージで、このうち何をやるのがこの拠点ですかという話になっていくのかもしれない。

○大泉委員

爪括弧つきの行政施設にしないにしました。

○本江副委員長

ありがとうございます。行政施設にしない。そうそう。何とかしたいというふうに言いたいですが。これではだめというのは、何か割と言いやすいのが出ちゃうということはありませんね。

○志賀委員

400年というのを考えたときに、さっきおっしゃった中で案内人のようなことになる人がどういう方で、どういう性格でとか、もう本当にそういうレベルでどういうふうに語り継がれるかというときに、バトンタッチが起きたときに、それが全く話が変わるときがあるというのは、身近でも何か体験することですけども、何かそれをどういうふうにしたらいいのかというのは、やっぱり300年後に何かがあったとして、それと響き合いながら、そのときあったことでないと400年前のことは話し得ないとすぐ思うので、となると生きている人間、その時代に生きている人間というのがものすごく大事で、なのでおっしゃっていたことがものすごく、本当にそうだなと思うのと。

あとこれ全然違うかもしれないですが、今日はブレインストーミングなので。星空を見たのも、おまんじゅうを配ったのも、震災のときに私が写真を拾ったのも、全部外だったという、路上だったりという、道だったりみたいなことがあって、それは公園とかのパブリックなものよりもっと外の世界ということはちょっと思ったので、キーワードとして路上というのを。

○大泉委員

触発されて。写真洗浄の話聞いたときに、僕はいろいろな光景が思い浮かんだんですね。やっぱり当時のことを。写真が物語っているものが、いろいろなものが失わ

れたり奪われたり、この人はどこにいるんだろうと思ったり、あの無数の写真が呼びかける力ってあったんですね。知っている人は誰も写っていませんでしたけれども、それでもやっぱりいろいろなことをイマジネーションさせて、災害の何かを浮かび上がらせる力があるというふうに、私は今でも一つの実相としては強烈だったと思うシーンなんですね。

でも、あの写真はプリントされたものが流されて、汚れて、剥離してというのが無数にあるという状況だったんですけども、スマホで写真を撮って現像しない世代の100年後の人たちがあれを見たときに、それに共感し得るのかなというのはいちよつと分からなくて、時代を超えて何かを訴えるものがあるのか、よく分からないですね、これというものになっているのかが、ちよつと私はイメージが、想像力が及ばない感じはします。

あとは避難所の入り口に無数の、「どこどこにいます」とか、安否確認とか、「無事です」とか「待ってます」とか、あの無数の貼り紙も震災の実相の一つだったと僕は思うんですけども、あれも全部をメールメッセージでやりとりする人たちにすると、手書きの紙が貼られていることのインパクトというのは、時代を超えて共有されるのかなというのが、ちよつと読み切れないなという感じはしました。

全くますます脈絡がなくなりました、すみません。

○志賀委員

アウシュビッツのいろいろな施設がありますよね。顔写真がずらっとあったりとか、身近なことで言うと、仏壇の上に自分の全然知らない先祖がいたりみたいな、ポートレートの面影みたいなことで、何かやっぱりものすごく強烈に、何も知らない人でもその人が目を見開いて外を見ている。その視線がどこにいるか分からないという、まなざしを受けるということで、強烈に幼い頃の私はそれが誰か知らなくてもものすごく怖かったというのもあるし、何かとても異質なものを感じていたという実感はあるんです。ただ、それが例えばすごく平たく言ってしまうと、今回亡くなった人の全員のポートレートが集まったアウシュビッツの記念館の壁みたいなものがあるというのがいいのか悪いのかも、まだ全然分からない状態で、今回はそれが当てはまるのか当てはまらないのか。ただ、津波とか地震の原因が自然であるというところで、何かちよつとまた違うアプローチが必要な気もするし、ただその写真の目を見開いてまばたきをすることのない写真の中の誰かがずっと外を見ているという、やっぱりその遺影の力というのは、面影としても全然知らない人に訴える力はあったとは思いますが、それが今回当てはまるかどうかは全然分からないという感じはあります。

○本江副委員長

予定の時間を過ぎています。急に終わるという。もう1回、また話す機会が遠からずあるので、何か半端にまとめないで、もやもやのまま帰ると。そして、新しい年号になって、連休もそのことをずっと考えていてください。それで、まだもうちよつと拡散のペースでいいと思うし、みんながメモリアルと言っているけど覚えておかなきゃいけないことは何なのというのは、まだちゃんと語れてないと思うし、通り一遍の話にしないためにやっているの、いろいろな事例も含めて話をもっとたくさん出せるほうがいいだろうと。その上で、ではサービスあるいはプロダクトのデザインとし

てどこを切り取るのかということ、また違うフェーズでやることになると思うけれども、こんなことぐらいは引き受けていくようなある営みをみんなでやるという、そういう話になっていけばいいのかなというふうに思います。

なので、言い足らなかったことはメモしておいて、次のときにまた言っていただきたいのと、多分次回もそんなに変わらない仕立てでやるので、何かあればメモしておいていただくとか、それぞれに全く違うところから来ているから、「今こういうのをやっていて、どうにも収拾がつかないんだけど、どう思う」みたいなところをそれぞれの持ち場に持ち帰っていただいて、それでまたいろいろなネタを集めてここに来て、ポジショントークじゃないよとは言ったけれども、違う畑をお持ちだから、そこから一月あると結構違うものを見つけてこられると思うので、それをまた持ち寄っていただくことを期待しております。

ちょっと延びましたけれども、一旦ここで今日のプレストはおしまいという感じです。では、委員長。

○野家委員長

ありがとうございました。見事なファシリテートで感服しましたけれども、ちょうど皆さんの議論が深まったところで、残念ながら時間に限りがありますので、本日は一区切りとさせていただきます、次回この続きを議論いただくと。

ただ、委員長の特権で一つだけ問題提起をさせていただくと、メモリアルということで今日一言も出なかったのは、原発事故のことです。つまり我々のメモリアルの中に原発事故を含めるかどうかというのは、この施設をつくるときに一つのキーポイントになるんですね。隣の県のことだからと頬被りするわけにもいかないし、ただ、扱い始めるとこれはもう切りがないことになりますから、その辺のことをちょっとメモリアル施設ということを考えるときに、原発事故をどう位置づけ、どの程度の比重で扱うべきかということそれぞれ皆さん方、次回までに考えてきていただければというふうに、最後をお願いしたいと思っております。

今日の議論、さまざまなことが出ましたけれども、この内容についてはまた事務局の方でまとめていただいて、大変だとは思いますが、ただ事務局の能力は1回目のまとめでもその実力ぶりは発揮されておりますので、何とかまとめてくださるものと思います。それをまた皆さん方にメールなりなんなりでサーキュレイトして、次回の議論に備えたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

本日はありがとうございました。

○事務局（庄子課長）

それでは事務局から2点ほど連絡がございます。

1つ目は、次回の日程でございますが、お手元の座席表の裏面に次回の日程を記載しております。次回の第3回検討委員会は5月16日木曜日の17時、本日は18時からでしたが、1時間早めまして17時からでございます。場所につきましては未定ですので、追ってご連絡いたします。

2つ目は、お帰りの際の出口ですが、前回と同じですが、本日お越しいただいた際と同様、北側玄関をお通りください。

以上が事務局からの連絡でございます。よろしく願いいたします。

○野家委員長

ありがとうございました。委員の皆さまから、もし言い足りないことたくさんあると思いますが、何か次回へ向けて一言言っておきたいということがあれば、よろしいでしょうか。

それでは、進行を事務局に引き継ぎますので、よろしくお願いいたします。

○事務局（高橋室長）

皆さま、長時間のご議論どうもありがとうございました。

以上をもちまして、第2回の中心部メモリアル拠点検討委員会を閉会いたします。どうもありがとうございました。